過度な注意の集中・持続と不安・抑うつとの関連

— 弁別妥当性の高い尺度を用いた検討 —

○松浦隆信¹・亀山晶子²・坂本真士²

(¹ 日本大学大学院文学研究科・² 日本大学文理学部)

キーワード: 注意バイアス, 不安と抑うつ, 弁別妥当性

Relationship among excessive and enduring attention, anxiety, and depression

Takanobu MATSUURA¹, Akiko KAMEYAMA² and Shinji SAKAMOTO²

(¹ Graduate School of literature and Social Sciences, Nihon Univ., ² College of Humanities and Sciences, Nihon Univ.)

Key words: attentional biases, anxiety and depression, discriminant validity

目 的

「人が自分自身の方へ注意を向け、自らが自らを注目の的としている状態や自己を意識しやすい性格傾向(坂本, 2000)」と定義される自己注目 (Self-focused attention) は、自己制御過程において、自分が理想と考える状態と現状の自分の状態に乖離がある場合に自己への注意を高め、不安・抑うつを発生させる機能があるとされている (Mor & Winquist, 2002)。特に、高不安者は脅威刺激に対して注意が向かいやすく、また高抑うつ者は自己否定感を高める認知に注意が向かいやすい傾向が指摘されてきた (Mogg et al., 1997; 坂本, 2007)。

しかし、不安と抑うつは現象的に併存しやすいため、本来は両者を適切に弁別できる尺度を用いた上で不安・抑うつを共に測定し、互いの要因を統制した分析を行った上で結果を解釈することが望ましい (Beuke, Fischer, & McDowell, 2003)。この点を踏まえ、田中他 (2007) は、自己注目と不安・抑うつ関連を不安と抑うつの併存を考慮に入れた上で検討するため、State-Trait Anxiety Inventory (STAI; 岸本・寺崎, 1986) と Self-rating Depression Scale (SDS; 福田・小林 1973) を使用し、偏相関分析等の手法を用いた分析を行った。その結果、自己注目は抑うつ以上に不安に対して関連が強いことを見出し、従来指摘されることの多かった自己注目と抑うつの関連は、不安を媒介とする見かけ上の相関であった可能性に言及した。しかし、この研究で用いられた STAI と SDS は不安・抑うつの弁別妥当性が低いため、結果の解釈には問題が残されている。

そこで本研究では、不安・抑うつ尺度の弁別妥当性が高いことが想定されている Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS; Zigmond & Snaith, 1986) の日本語版 (八田他, 1998) と、Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS; 福井, 1997) を用いた分析を実施した。なお、注意の集中に関しては外的な対象への注意集中が不安や抑うつの軽減に有効であるという知見も鑑み (坂本他, 2000; Zou et al, 2007), 本研究では自己注目のみでなく外的対象に対する注意集中を測定する尺度も含めて分析を行った。

方 法

対象 大学生 271 名 (男性 128 名, 女性 143 名 平均年齢 20.44±1.19 歳)

使用尺度 没入尺度 (自己没入と外的没入; 坂本, 1997), HADS 不安・抑うつ尺度 (八田他, 1998), DAMS 不安・抑うつ尺度 (福井, 1997) の 3 種類を使用した。

実施方法 大学の授業内で無記名の集団形式で実施した。

結 果

相関分析による弁別妥当性の検証 HADS と DAMS の不安・抑うつ尺度間の相関係数を算出した (Table1)。その結果、両尺度ともに不安と抑うつの併存に関して想定されてい

る .50 程度及びそれを下回る相関が示された (HADS: $r=.338$, $p<.001$; DAMS: $r=.540$, $p<.001$)。この結果から、両尺度は弁別妥当性がある程度保証されていることが確認された。

偏相関分析 次に、没入尺度と各尺度における不安と抑うつ尺度の一方を統制した場合の偏相関係数を算出した (Table1)。その結果、自己没入は HADS うつ尺度を統制した場合に HADS 不安尺度との相関が有意に高いことが示された。外的没入と不安・抑うつ間には有意な相関は見られなかった。

Table1

相関分析及び自己没入と各不安・抑うつ尺度との偏相関分析の結果

	HADS不安	HADSうつ	DAMS不安	DAMSうつ
相関	.338***		.540***	
自己没入との 偏相関	.535***	-.023	.161*	.204*

*** $p<.001$ * $p<.05$

注: 偏相関係数は、対になっている不安・抑うつ尺度をそれぞれ統制した値を記載

重回帰分析 説明変数に自己没入及びコントロール変数として不安・抑うつのいずれかの変数を投入し、基準変数には説明変数として投入をしなかった不安・抑うつ変数を投入し、自己没入が不安・抑うつに与える影響について検討した。その結果、自己没入は HADS 不安尺度に対して有意な影響が見られた ($\beta=.551$, $p<.001$)。一方、自己没入の DAMS 不安尺度への影響はごく弱いという結果が示された ($\beta=.143$, $p<.01$)。自己没入の抑うつへの影響は見られなかった。

考 察

本研究結果から、不安・抑うつ尺度の弁別妥当性を考慮に入れた場合でも、自己注目は不安、特に HADS で測定された不安との関連が見られることが分かった。実験的手法を用いた研究でも、高不安者は高抑うつ者よりも注意バイアスを示しやすく、逆に高抑うつ者は記憶バイアスを示しやすいことから (藤原・岩永・生和, 2008), 自己注目は抑うつ以上に不安を賦活する作用を有していると考えられる。なお、本研究で使用した 2 尺度で結果が異なった理由については、両尺度が尋ねている感情の持続期間が異なっており (HADS は 1 週間程度で、DAMS は 2~3 日)、自己注目が比較的長期的な不安の持続に影響がある可能性が示唆される。今後、この点に関しては縦断研究や実験的手法を用いた研究で精査していくことが望まれる。

引用文献

Mor, N., & Winquist, J. (2002). Self-focused attention and negative affect: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 128, 638-662.